東日本大震災以後の世界を「生きる」とは？――映画『息衝く』（木村文洋、2018）

木村文洋監督作『息衝く』上映
日時：2019年10月3日（木）
会場：名古屋大学人文学研究科棟1階130号室

加島 正浩

2019年10月3日（木）に木村文洋監督をお招きして、監督の作品である『息衝く』（2017年、team JUDAS）の上映とディスカッションを行った。来場者と監督とのあいだでは多くの議論が交わされたが、フロアから出た「震災後のフィクション映画は、「絆」に代表されるような、人間同士の連帯や紐帯、団結などが強調される傾向にあったと思うが、『息衝く』は人間関係の断絶やつながることができない人々を描いており、その点で新しいのではないか」という指摘は特に重要であると感じた。

たしかに、震災後の人々の生活を描いた良質な近年のフィクション映画として、廣木隆一『彼女の人生は間違いじゃない』（2017年、GAGA）や、荒井晴彦『火口のふたり』（2019年、ファントム・フィルム）などがあるが、両者とも自らを支える確かな人間のつながりを求める映画である。前者は、週末になると福島の仮設住宅から、デリバリーヘルスで働くために東京へと出て行く女性が、いつでも自分以外の誰かと存在を取替えることが可能な性産業の仕事に身を晒しながら、そこで出会った男性スタッフと性的関係を介さない精神的なつながりを得て、自らを支えていく映画であり、後者は、性的関係を通して強烈に結び付きあっていた、いとこで元恋人同士の男と女が、震災後に結婚して子どもをつくりたいと望むようになった女の結婚式のために再会し、再び性的に強く結びつき、富士山の噴火という災害を機に、「肉体の声」に従い結婚を取りやめ、ふたりの関係を続けていくことを決意する映画である。性的関係の捉え方に差異はあるが、両者とも自らが生きていくために必要な人間との関係を模索し、そのような関係が構築可能なことを示している。では『息衝く』はどうであろうか。

『息衝く』は、政権与党の「種子党」の母体である日蓮系の新興宗教「種子の会」の二世信者である則夫（のりお）、大和（やまと）、慈（よし）の3人が、それぞれに問題を抱えながら東日本大震災後の日本を生き抜く姿が描かれる。則夫は余命幾ばくもない母を抱えながら、役所の仕事と、種子の会の活動に励んでいたが、仕事をやめ母の死をきっかけに種子の会もやめ、自らの生き方を模索する。大和は、幼少期から3人の精神的支柱となっており、種子の会でもカリスマ的存在で、国会議員まで勤めながら、自衛隊派兵を契機に失踪した森山の思想を、東日本大震災以後の日本にも継承すべく奮闘している。慈は、母が自らの部屋で自殺したことを気にかけつづけており、父との関係も上手くいかず、離婚した前夫とのあいだの息子とふたりで生活していたが、子どもも向こうの家庭に取られてしまう。

大和と則夫は、種子党の若手である西村武則を夏の参議院選に送りこむために、森山の失踪を機に種子の会から離れていった森山派の信者の集票に走り回る。その結果、西村は当選し、大和は種子党の秘書として、国政に関与するようになる。大和は森山の思想を反映すべく奮闘するが、党内からの反発にあい、現実を見ろと諭され、失踪した森山の居場所を知らされ、3人で会いに行くことになる。かつての威厳を持たない森山に大和は、なぜ社会と向き合うことをやめ、失踪したのかを詰問するが、森山は3人を煙に巻く答えしか返さず、かつての自分の姿を理想視する大和を一喝する。3人は森山から明確な答えを引き出すことなく、それぞれの活動の場に戻っていくというのが、大まかな映画の内容である。

『息衝く』においても、人間関係を一新し、新しい生活と関係を模索しようとする人物として則夫が描かれる。

仕事をやめた則夫は、役所の仕事で生活保護の面倒をみていた男性とともに住むようになり、再会した慈にも「僕と一緒に生きていかないか」と求婚する。しかし、男性は則夫の母の死後、親類がいる九州に帰ることを決め、慈にも「生きる?」と問い返され、断られる。これまでの関係をすべて清算し、自らが望む新たな関係を構築することに則夫は失敗し、さらに「生きる」ということも自明なものではなく、それ自体を考え直す必要があることも示される。そもそも「生きる」とはどういうことなのか。

そして『息衝く』は、「宗教者」として生きるということも、あわせて問いに付している。大和は宗教者であることと、政治家であることの両立を目指し、東日本大震災後の日本において原発廃炉の計画を示すことの重要性を訴えるが、種子党は政権与党としての存在感を高めることを優先し、もんじゅ廃炉の提言を政策に組み込むなど大和の提言に譲歩しつつも、原発の廃炉を政治的課題とすることには慎重な態度を保っている。大和は、現在の種子党が本当に苦しんでいる人に寄り添っていないと感じつつも、政治家でなければ何もできないという板ばさみのなかで奮闘している。そして、この状況が大和を苦しめているといえる。政治家として割り切り、種子党の政策に完全に同調すれば、党で地位を占めたうえで、上層部ともめることはなくなる。他方、森山のように政党と縁を切り、宗教者として自律すれば、他者の思惑と自らの主張を折り合わせる必要はなくなる。一方の極に振り切らず、両立を目指すからこそ、大和は苦しむのだといえる。しかし、私たちは他の極を切り捨て、一方の極のみに自らを託して「生きる」ということが、できるのであろうか。

則夫が種子の会を脱会する際、これまでの母の苦労や自らの功徳を台無しにする行為だと会長や大和から咎められる。会をやめるということが、そのまま会の教えや仲間を捨てるものとして捉えられるが、会をやめたところで、則夫が持つ思想がなくなるわけでも、大和との関係が終わるわけでもない。大和は、再会した森山に、なぜ自分たちから離れていったのかと問うが、森山は離れていない、いま一緒にいるだろうと答えている。組織から離れることで、かつての人間関係がかならずしも完全に断絶するわけではない。森山の失踪後、3人が森山のことを気にかけていたように、森山の思想が大和に受け継がれていることを期待する信者がいるように、その人への思いが消えるわけではない以上、関係は薄くつづいているともいえる。則夫は会長に咎められ、「私は私の道を行きます」と答えるが、何かとの密着した関係を終えて「私の道」を行くとき、他の関係と私は対立するのではなく、むしろ同調する部分と相違する部分が判別しにくい状態で、一層複雑に混在しあうのではないか。森山と別れる際則夫は、自分たちの世界へ帰りますと告げるが、森山にここだって世界だろと返される。私たちはかつて密接にあったものとの関係を、断ち切ったつもりにはなれても、完全に切り落とすことはできない。何が自らとどのように絡み合っているかも判然としないなか、そのなかを生き抜いていくしかない。

それは土地との関係においても、同様である。則夫の母が、幼い則夫を連れて六ヶ所村に夫と娘を残し、東京に出てきた理由に、六ヶ所村の再処理工場の問題があったことが暗示されるが、同時に六ヶ所村や残してきた家族への思いがあることも示唆される。東日本大震災以後に敷衍して考えれば、福島を離れたものの(その背後にはそれぞれの様々な理由と決断があるだろう)、福島への思いを断ち切りがたく感じる人もいることに思い至る。また、福島に戻りたいと願う避難者の思いに応えることが、低線量被曝の問題を勘案せず、線量が低いとも言いがたい地域へも帰還を進めようとする日本政府の思惑に同調することになるという苦い実情を、どのように考えればよいのかということもある。答えは出ない。しかし、

政府に充分な補償を請求し続けることは当然としても、福島への帰還を諦めてもらい、避難先での生活をもとめることも、政府の思惑に同調してしまうことを知りつつも、福島に帰還したい人の思いに全面的に賛同することも適切ではないように思う。おそらくは二極にある選択肢のどちらか一方に振り切り、答えを出してしまうのではなく、変化し続ける状況を見続けながら、二極のあいだで思考しつづける必要があるのではないか。この二極のあいだで、粘り強く考え苦しむことが、本当に苦しんでいる人に寄り添おうとする「宗教者」の面と、原発事故後の社会政策を考える「政治家」の面とで苦悩する大和の姿に重なっていくだろう。

特定の関係を終わらせ、一方の極に身を預けることができるならば、そのあいだで苦悩するよりは楽である。なぜなら、終わらせることができるならば、最初から作り上げることも、やり直すことも可能だからである。しかし実際には、断ち切ろうと試みても、それまでに作り上げてきた思想からも、関係からも、土地からも、家族からも、社会からも、政治からも、完全に自由になれるわけではない。半端に壊れてしまった世界を、それゆえに最初からやり直すことができない世界を、しかし壊れているがゆえに、いつか終わるかもしれない世界を、私たちは生きなければならない。森山と3人が別れた後に、分割された画面の上で爆発が起こるのは、そのことを示しているのかもしれない。

すべては断絶しているかのようにみえながら、引き続いており、前後や二項に分断されながら、結びつき合っている。そのような複雑で混迷とした関係があちこちに点在しているのが、東日本大震災以後とするならば、そのあいだで踏みとどまって思考し、苦闘する姿勢の重要性を『息衝く』はみせてくれているといえる。そして、その苦闘こそが「生きる」ことであるならば、『息衝く』は、東日本大震災後を「生きる」われわれの姿勢を厳しく問う映画でもあるのだ。